

郡山市の暖房器具使用状況についてのアンケート調査

○佐藤篤史* 吉田燦**

(*郡山女大, **日大理工)

【目的】東北地方の室内環境関する調査はこれまでも多く行われているが、本調査は、気候条件や生活文化が大きく異ならない一地域（郡山市）を対象として暖房器具に関するアンケート調査を行い、全体像を把握すると共に、その中で住宅の断熱性能や暖房器具の使用状況が、気候条件以外の諸条件によりどのように異なっているかを検討するものである。

【方法】郵送による自筆式のアンケート調査とした。対象者は郡山市の電話帳より無作為抽出した290名と、郡山女子大学学生の父母のうち、同市内に居住する190名（全数）とした。ただし父母の回答結果は、参考として用いることとした。配布時期は1996年1月上旬であり、3月末日までの返送を有効とした。無作為抽出の有効回収率は42.4%である。アンケートの項目は大きく分類して①家族構成・年齢など。②住宅の形態・構造など。③暖房器具の種類と暖房状況など。④暖房に対する意識・感覚など。である。

【結果】住宅は一戸建てと集合住宅が約7：3の割合であり、一戸建ての80%以上が木造住宅であった。木造住宅の断熱材の敷設率は約60%であり、築後年数が20年未満の住宅で敷設されている場合が多い。しかし使用箇所は壁のみなどの一部分が多く、壁・床・天井すべてに敷設されている住宅はこの中の30%程度であった。また、断熱材の無い築後20年以上の住宅には、高齢者の居住する割合が高くなっていた。居間の使用暖房器具は現在でもこたつと石油ストーブの使用率がもっとも高く、農家あるいは高齢者で、この使用率は高くなっていた。その他、集合住宅では電気による暖房の使用率が高いことや、農家は低めの室温で満足している様子など、生活スタイルによる違いが見られた。